

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 ( 学 術 )	氏名	村 上 佑 介
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
現代におけるサイト・スペシフィック彫刻論 —日本のアート・プロジェクトを中心に—			
論文審査担当者			
主 査	教授	江崎 哲	
審査委員	教授	菅村 亨	
審査委員	教授	内田 雅三	
審査委員	准教授	三根 和浪	
審査委員	准教授	一鉢田 徹	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、場と密接な関わりを持つ立体作品を、「サイト・スペシフィック彫刻」として捉え直し、彫刻が、今日その展開の場をアート・プロジェクトという新しいムーブメントの中に拡張したことで得た特質や、現代におけるサイト・スペシフィック彫刻の可能性や課題を、その実態を考察することで明らかにすることを目的としたものである。</p> <p>本論文は、序章と結章を含め6章で構成されている。</p> <p>序章「問題の所在」では、研究の目的と先行研究の状況について述べられている。</p> <p>第I章「サイト・スペシフィック彫刻」では、「サイト・スペシフィック彫刻」という言葉の定義を行うために、まず「サイト・スペシフィック」そのものの意味やその歴史的経緯、また現代において定義が曖昧となった「彫刻」の状況を踏まえた上で、①「作家が精神的必要性によって生み出した、実用的必要性を主目的としていない、鑑賞を主たる行為として伴う立体を創造する芸術、また、その作品」という彫刻の定義に沿ったものであること、②「作品を設置することで場を読み替え、特殊な場を生成すること」「場の特殊性を所与の条件とし、それに沿うように作品を生成させること」というサイト・スペシフィックの二つの方向性の両方、もしくは一方が認められる場を前提とした作品であること、③展示専用の施設ではない場で展開されているものであること、④期間限定の「暫時展示」という方法をとっているもの、という4つの条件を提示している。</p> <p>第II章「日本におけるサイト・スペシフィック彫刻」では、特に日本のサイト・スペシフィックの原型となる1960年代以降の彫刻設置事業や、1990年代以降に隆盛してきたアート・プロジェクトの変遷と今日の特徴について述べている。</p> <p>第III章「アート・プロジェクトにおけるサイト・スペシフィック彫刻の特質」では、調査対象とするプロジェクトの選定と調査方法について吟味し、それに基づいた現地調査と、素材・動性・時間変化・規模・住民の作品参加・歴史的背景との関連性・形体・設置状況という因子それぞれについての作品考察を行った。それにより、(1)「意味的要素」と「空</p>			

間的要素」の利用による作品形成、(2) 多様な素材の使用、(3) 場への「同化」と「介入」、(4) 現実空間との連続性、(5) 複合的な性質、という5つの特質を明らかにしている。

第IV章「サイト・スペシフィック彫刻に対する鑑賞者の意識調査」では、前章の現地調査や文献調査とは異なるアプローチとして、自身の作品をもとに、事例①「マーメイドカフェ広島大学店」、事例②「第3回吉富蔵ART展」、事例③「ART in 酒蔵 2012」、事例④「ART in 酒蔵 2013」において、それぞれ鑑賞者の意識調査を行った。それにより、(i) 複合的な鑑賞、(ii) 親和性、(iii) 要素による印象の差異、(iv) 混在する二つの性質、という4つのサイト・スペシフィック彫刻と鑑賞者を取り巻く成果と課題を導出している。

そして結章「サイト・スペシフィック彫刻論」では、第III章、第IV章で明らかとなった特質や成果と課題の関係性を整理し、①フレキシブルな表現、②「同化」と「介入」に応じた空間の変容、③場の力の作用、④境界の喪失、⑤求心性と遠心性の混在、⑥人的要素の可能性、という6つの結論に集約させている。

この結果から、サイト・スペシフィック彫刻は、そのフレキシブルな表現や、人的要素の活用により、時と共に変化し続ける場に「モノ」として密接に関わることができる新しい表現と言えるものとし、また「コト」として方向性のみを追求するのではなく、多様な素材、様々な場の選択を行い、今一度、作家の「てわざ」によって造形美を感じられる作品を追求することで、従来のもとは異なった実験的な作品を生み出すことも十分可能である、との提言を行っている。

本研究は、主に以下の点において高く評価できる。

(1) これまで公共空間や、美術館・ギャラリー等といったホワイトキューブに展示されてきた彫刻とは異なる、新しい概念としての「サイト・スペシフィック彫刻」を定義し、特に、その展開が顕著に見られるアート・プロジェクトに注目することで、その可能性や課題を導出、論述している点。またそれまでの、「行為」を主軸にした作品やプロセスを考察している先行研究とは異なる、独自の視点からのアプローチである点。

(2) 日本全国各地のアート・プロジェクトについて、独自の指標を用いて調査することで「サイト・スペシフィック彫刻」の5つの特質を明らかにしている点。またその調査の中で鑑賞者の意識調査に関わる課題を見だし、それを自身が「サイト・スペシフィック彫刻」の制作・展示・調査を行うことで、4つの成果と課題を明らかにしている点。

(3) 最終的に「サイト・スペシフィック彫刻論」の特質として示された6つの可能性と課題はどれも示唆に富むもので、今後の彫刻芸術の展開に大きく寄与できるものと考えられる点。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 26年 2月 19日